

紛争の火種を絶やしたい 平和構築が私の仕事です。

誰もができるわけではない地道な活動を続ける女性たちの存在は、私たちに勇気や希望を与えてくれます。

撮影・清水朝子 ヘア&メイク・レイナ

常に世界中で勃発している武力紛争。終結後は、再発を防ぎ、長期的な平和を築くための武装解除が急務となる。武器を回収し、兵士を除隊させ、職業訓練を受けさせて市民生活に戻す——それはDDR（武装解除、動員解除、社会復帰/Disarmament, Demobilization, Reintegration）と呼ばれ、瀬谷ルミ子さんは、世界でも数少ないそのエキスパート。エイボン女性年度賞の二人目の受賞者だ。

自らの危険を顧みず、紛争地域の平和に尽くす。深く感銘を受けました。
マイケル・アレンさん
エイボン・プロダクツ(株) 代表取締役社長、CEO

オーストラリア生まれ。アジア太平洋地域で25年間、シニアエグゼクティブを経験。化粧品のマーケティングに詳しい。日本在住は15年以上。今年2月現職に。



またこの国に生まれたい。
紛争地をそう思える社会に。
日本の存在意義も高めたい。
瀬谷ルミ子さん

せや・るみこ 認定NPO法人日本紛争予防センター(JCCP)事務局長

兵士の武装解除、社会復帰を助ける。アフガニスタンのカルザイ大統領から助言を求められる立場にあったことも。'11年ニューズウィークの「世界が尊敬する日本人」の一人に。

瀬谷 イスラム圏では長老や男性の司令官と直接話ができないことがあります。そのときは男性に説明して交渉してもらえばいい。別の手を考えればいいだけです。むしろメリットのほうが大きいですね。
アレン それは意外です。
瀬谷 女性の被害者が私にだけ心を開いてくれたこともあります。ソマリアでは、若い女性にどんな職業の男性と結婚したいかと尋ねたら、国連職員と海賊と言ったのです。いくら軍隊を送って海賊を捕まえても、憧れの職業なら、減るわけがない。海賊にならないよう他の職業を与えることが必要なのだ、と女性と話すことで問題の本質が見えたんです。

マイケル・アレンさん(以下、アレン) 自らの危険を顧みず、献身的な平和への取り組みに、まさに本年度の選考テーマである「パッション」を感じました。アフガニスタンやソマリアなど紛争の最前線だけでなく、世界に影響を与える活動ですね。
瀬谷ルミ子さん(以下、瀬谷) 私は国連のほかに日本の外務省、NGO団体で武装解除を専門に仕事をしてきました。今はより広く紛争地の被害者とコミュニティ全体が再生するための活動を行っています。
アレン なぜ、これほど危険な仕事をしようと思ったのですか。
瀬谷 進路を決める高校3年生のときにルワンダの内戦で犠牲になった母子の写真を目にし、衝撃を受けたと同時に、紛争解決に関わる仕事をしようと思ったんです。そのなかで自分にしかできない専門として決めたのが武装解除でした。
アレン 女性であることが、活動の支障になることはありませんか。

スの要素が入ったほうがうまくいくことは、得意な企業にまかせる。治安の維持や警察の訓練など、経済活動を行う上で必要な環境整備をJCCPのような専門団体が行う。連携すれば、紛争地の人々により多くの生き方の選択肢を提供できます。現地には多くのチャンスやリソースがあります。それを知ってもらい、橋渡しをしたい。生涯をかけてやりたいですね。
アレン 企業がができることもあるのですね。

瀬谷 日本は第二次世界大戦で破壊され、復興した国です。その姿を見て、自分たちの国も今はボロボロだけれど日本のようになるのではないかと希望を与える存在になっています。アフガニスタンでは、欧米ではなく日本人が言うのだからと、武器を差し出してくれることも。日本が背負ってきた歴史的経緯には大きな価値があるので、その信頼を世界で生かせるようにしたい。
アレン 日本の女性に向けて、メッセージはありますか。

瀬谷 日本で生活する私たちが当たり前と思っているスキルが、現地支援に役立つこともあります。今いる環境の外に少しだけ目を向け、行動することで現地の人々の現状を変えることができる。チャンスを見つけ、飛び込んでほしいと思います。
アレン 企業も個人も社会のニーズに貢献できることがある。スキルを磨き、発信していきましょう。

兵士として育った、少年兵を除隊させる。



'09年、スーダン。元少年兵を除隊させるための交渉を南部スーダンの准将と行った。

アフガニスタンでは兵士6万人を武装解除。



DDRにより約2年で旧国軍兵士6万人の武装解除が完了した。写真は集まった武器。

ケニアの国内避難民の子どもたちと。紛争の芽を摘む地道な活動にも携わる。



国内暴動による避難民の定住先でJCCPは住居と給水設備を支援。

エイボン女性年度賞とは。
活動の分野を問わず、社会的にめざましい活躍をし、立派な功績をおさめ、女性の新しい可能性を示唆する先駆的活動をしている女性に授与される。1979年から始まり、今回で33回目。3名の年度賞受賞者のうち1名に大賞が授与される。発表は来年1月。

服部津貴子さんはっとり・つきこ



国連、外務省、現在の日本紛争予防センターと一貫して紛争地域の兵士の武装解除を行う。政府では手の届かない当事者達の声に耳を傾け、心の武装を解除して紛争予防する等、日本女性ならではの繊細な世界平和への貢献が女性賞に相応しい。

草野満代さんくさの・みつよ



フリーアナウンサー。NHK退職後、TBS、NEWS23キャスターとして活躍。文部省日本ユネスコ国内委員を務める他、様々なメディアで活躍中。世界が求めている。

甘糟りり子さんあまかす・りりこ



作家。都市に生きる女性の視点で、流行や社会を語る切れ味鋭い文章が人気。ファッションや映画、食、スポーツについても造詣が深い。

エイボン女性年度賞 選考委員が語る、授賞のポイント